



TITLE:

指數の研究

AUTHOR(S):

汐見, 三郎

CITATION:

汐見, 三郎. 指數の研究. 經濟論叢 1928, 26(6): 992-994

ISSUE DATE:

1928-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128824>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經 濟 論 叢

號 六 第

卷六十二第

行發日一月六年三和昭

論 叢

租税における强者の專横 法學博士 神戸 正雄

臺灣の小作制度 法學博士 河田 嗣郎

定期船事業に於ける運賃の最低限度 經濟學博士 小島昌太郎

說 苑

近江商人の起源 經濟學士 菅野和太郎

助郷と農民の生活 經濟學士 大山敷太郎

雜 錄

中央・地方財政に於ける租税配分 經濟學士 中川與之助

英國の産業合理化 經濟學士 大塚 一朗

銀行券の數量制限と正貨準備 經濟學士 楠見 一正

指數の研究 經濟學博士 汐見 三郎

附 錄

本誌第二十六卷總目錄

指數の研究

沙見三郎

一 世界大戰の前までは指數の研究は統計學の一小部門を占むるにすぎなかつたが、最近に至り指數論即ち統計學と考へらるゝ程、指數の研究が重要視せられるに至つたのである。

指數の研究の中最も重要なものは物價指數に關する研究である。従つて茲に指數の研究と云ふも主として物價指數が中心題目となるのは當然と言はねばならぬ。

物價指數の研究は大體二つの型に支配せられてゐる。一つは、物價指數それ自身に疑問を抱き其の意味を明らかにせんとするのである。二は、物價指數なるものには些の疑惑をも抱かず與へられたる統計材料に如何なる數學的加工を施さんかと努力する行き方である。此の二つの異なる態度は、物價指數に關する研究をやゝもすれば曖昧ならしめんとする傾向をもたした。最近入手せし Gottfried Haberler 著 *Der Sinn*

3) 氏の意見は *Die Notendeckungsvorschriften der Wichtigsten Zentralnotenbanken*, Berlin 1926 に現はれてゐる

der Indexzahlen (Eine Untersuchung über den Begriff des Preisniveaus und die Methoden seiner Messung) はあたかも此の二問題を明瞭に區別し議論をすゝめてゐる。以下彼の説く所を紹介する。

II 本書の第一部は Mathematisch-statistischer Teil と名づけられてゐる。物價指數を作製する data はかくかくのものなりと定めて、それを前提として研究をすゝめてゐるのである。

此の方面に於て非常な業績を挙げたのは Irving Fisher であつた。彼は已に The Purchasing Power of Money に於てこれを完成し所謂理想的物價指數なるものはその產物である。

Fisher は物價指數作製の二要素として各商品の價格とその取引數量との二つを考へてゐる。この兩者を如何に組合はすべきかについて平均の問題と秤量の問題とが彼の研究の中心をなしてゐる。

Fisher の研究に對しては「物價指數の蓋然誤差を

一〇・八五%に縮小した」點について最大の讃辭が呈せられてゐる。然し此の讃辭に對しては種々の異論が行はれるのである。かゝる正確なる物價指數を作製するに適當した data が果して實際上蒐集し得るや否やの疑問である。更に起る疑問は、たとへ正確なる data を蒐集し得たりとするもその所謂理想的物價指數なるものは經濟學上果して何を意味するやの點である。目標を定めずして無批判的に數字の離合集散を試みることは計算的興味をそゝる以上に何らのもたらす所なしと云ふのである。

III Haberler の書の第二部は Oekonomischer Teil にして第一部とは異なれる著しき特色を示してゐる。第一部が物價指數の本質如何を問題とせず、與へられた統計材料を克明に整理せんとするに對し、第二部は、問題を物價指數の本質に廻らしめてゐるのである。

第一部に於ては商品の價格と數量とが判明する限り直ちに物價指數を作製する事が出来たのである。従つ

て材料の吟味を試みず専ら「すべての目的を達する一つの物價指數」An Index-number for alle Purposes 換言せば「すべての目的をも達せざる一つの物價指數」An Index-number for no Purposes を作る弊に陥るのである。第一部の立場の Monismus なるに對し第二部の立場は Pluralismus として、指數の目的を分析し各目的に應じたる物價指數を算定すべし處にその特色を有してゐる。第一部が平均とか秤量とかの統計方法論に液頭せるに反し、第二部は所得指數 (Der Einkommensindex) 貨幣債務の指數 (Der Index für Geldschulden) 通貨政策に關する物價指數 (Der Preisindex als Richtschnur für die Währungspolitik) 景氣變動を示す物價指數 (Der Preisindex in der Konjunkturtheorie) 等の經濟上の諸問題に議論をすゝめてゐる所以である。

四 Haberler は、その序文に於て、物價指數の研究に關する極端なる二つの立場を擧げてゐる。一つは指數を中心とする物價指數の研究であつて、云はゞ形式的及び數字的立場である。殆んどすべての物價指數研

究者の守つてゐる態度である。二は物價に重きを置く物價指數の研究であつて、その結論は物價指數そのものを否定することゝなる。この態度をとる人は少數ではあるが、Pearson, Wicksell, Mises 等の有力なる學者を網羅してゐる。

Haberler は其の著の第一部に於て指數重視論を紹介し、結局物價指數の盲目的肯定論が經濟學上支持しがたきことを説いてゐる。然し彼は第二の極端なる立場即ち貨幣價值及び物價平準を否定し、従つて物價指數を絶対に否定するが如き懷疑説にも満足することが出来ないものである。その結果、彼の著書の第二部にあらはれたる彼自身の思想は絶対的肯定論でもなく、絶対的否定論でもなく、ある條件の下に物價指數を肯定せんとする第三の立場である。

我が國に於ても最近物價指數が盛に行はれ已に研究時期を去り實用の時代に入つてゐる。恰かも此の際物價指數に對し條件付肯定論を試むるのが、Haberler の意見である。傾聽すべき所説と云はねばならぬ。